

研究者と巡るセメント美術

美術史研究者 坂口英伸

No.20 陸の上のビーナス

本稿では彫刻が置かれる空間について考えたい。彫刻作品とは、物質的な素材で造形物を作りながら「美」を表現する空間芸術といえる。さらに深めれば、戦後の野外彫刻は、展示する作品の空間をも作品構成の要素と考える環境芸術の先駆けともみなせよう。すなわち彫刻作品とは、作品を取り巻く空間や環境とは相即不離であろう。

このテーマを考えるうえで格好の作例となるのが中川為延の《浴光》だ（図1）。銚子マリーナ（千葉県銚子市）の本作は、彫りの深い洋風の顔貌の人魚がモチーフである。その上半身は人間の女性の裸体そのもの、下半身は魚類の特徴を備えている。尾びれは大きく後方に湾曲し、日光浴をしている艶めかしい姿が見事に表現されている。

像の脇に設置された金属製銘板（作品情報を記した説明版）は、「この人魚像「浴光」は彫刻家中川為延氏（1904—1967）の作品で、小野田セメント株式会社（現・太平洋セメント株式会社）から1956年（昭和31年）に銚子市へ寄贈されたものです。作品は、白色セメントを素材として高度な技術で作られており、銚子駅前に設置されて永く市民に親しまれてきました。このたび、銚子マリーナのオープンに伴い太平洋セメント株式会社の御協力で修復を行い、マリーナのシンボルとして当地に移設しました」と、当時の市長の名前で《浴光》に関する基礎情報とその移設の来歴を伝えている。

銘板が語るように、もともと本作は小野田セメント株式会社から銚子市に寄贈され、銚子駅前に設置された。設置当時の人魚像の周囲には、水をたたえた池が備えられ、人魚が生きていくうえで必要不可欠な水が提供されていた。人魚という作品のモチーフに合わせたこの配慮に設置者の細やかな配慮が感じられる。そこには作品と環境の一致がみてとれる。

野外彫刻にとって、設置環境（空間）は作品の構成要素であり、作品にふさわしい場が求められる。現在の本作は本来の設置場所である池から撤去され、淡水と海水の相違があるとはいえ、新たな移設場所にマリーナという海辺が選定された点は好ましいと筆者は思う。そもそも銚子市という日本有数の漁港が人魚にふさわしい土地である。もし仮に本作が水とは無縁の空間に置かれたならば、本作が持つ意味は半減したことだろう。

実のところ、同じような境遇を辿った作品が鹿児島県枕崎市にある。「小野田セメントによる寄贈→駅前に池を建造して設置→港に移設される」という同一の流れをもち、しかもその作品は同じ作者による同名の作品なのである。枕崎市はカツオの水揚げで全国有数規模を誇り、九州の最南端に位置する。同市の《浴光》は、1956（昭和31）年の野外彫刻展に出品され、開催期間中に会場の日比谷公園での展示後、枕崎市に寄贈された。作品名は同じく《浴光》だが、銚子のそれと比較すると、人魚のポーズにやや相違がある。この枕崎市の《浴光》も、元々は枕崎駅前に設置され、この人魚像も水を湛えた小さな池の中に置かれ

ていた（図2）。1987（昭和62）年に現在地の枕崎漁港に移設された。仮にこの作品が水と無縁の内陸部に移設されていたならば、作品のテーマとその魅力が大きく損なわれていたであろう。両者はともに水に縁のある場所に設置され、作品のテーマに寄り沿おうとする関係者の心遣いが感じられる。



図1 銚子マリーナに設置されている《浴光》



図2 枕崎駅前に設置されていた頃の《浴光》

画像提供：太平洋セメント株式会社